

丹下拳闘倶楽部
TANGE KENTOU CLUB

TRANS-AM 00

GANDAM-OO ONLY IMAGINATION BOOKs. トランザム・ダブルオー

TANGE KENTOU CLUB

トランザム・ダブルオー

TRANS-AM00

GANDAM-OO ONLY IMAGINATION BOOKs.



■前書き

みなさまこんばんわ。
マリナよりもスメラギ！な
横田守です。

美少年がザックザクの
ダブルオーの世界において
「いいわ、お姉さまが
教えてア・ゲ・ル」的な
妖艶さがステキ。
胸とか腰のクビレが
たまりません。

いや、マリナ[illegible]

[illegible]
[illegible]
一押しです、ハイ。
渋い！カッコイイ！
自分もあんな大人に…
…ってもうそれはさすがに
無理ですか。

ところで
ガンダムマイスターって
「何故にワインの人？」って
言ったら
「それはソムリエです」って
言われてしまいました。

恥ずかしい（笑）


I...FOR SOME REASON,
KNOCK
KNOCK
NO! DON'T !!
COME IN, IT'S OPEN !
? ... UM,
WHAT WAS THAT JUST ...!!
AAH. THANKS FOR A LITTLE WHILE AGO.
MS. FELDT ...WAS IT?
DON'T LOOK FELDT !!
WHENEVER I LOOK AT HIM I GET SO DISTRACTED ...
AS YOU CAN SEE I'M IN THE MIDDLE OF SOME-THING ...OKAY!!

WHAT? YOU'RE NOT GOING TO LEAVE?
OR COULD IT BE YOU WANT TO DO THINGS LIKE THIS WOMAN BEING PINNED UNDER-NEATH ME?
DIDN'T I TELL YOU I'M NOT MY DEAD BROTHER?
WELL... BUT...
...AL-RIGHT. I'LL HOLD YOU.
AH
TH, THAT'S, I... JUST ...
AAAH
I ONLY LOOK LIKE MY BROTHER, I'M ME.

PUT IT IN YOUR MOUTH,

WHAT'S STICKING IN THIS WOMAN'S *PUSSY*.

THIS **COCK** SMEARED WITH HER *PUSSY* JUICES.

IF YOU DO THAT, THEN I'LL DO AS YOU WISH.

NOO! ST, STOP ITT !!

NO, NOO !!


HAHA, ARE YOU SERIOUS ?
D, DON'T SPREAD ME OPEN LIKE THAT.
YOU WANTED TO DO ME THAT MUCH?
COME ON MS. SUMERAGI! *YOU* SHOULD DO IT TOO!!


THAT'S IT, GOOD..
HAAN!
AA
AHI
L... LIKE THIS?
AAH... CUM-MING, I'M CUM-MING!!
HYAA BUH!!


WHAT... YOU DIDN'T THINK WE WERE ALREADY FINISHED DID YOU?
AH...KH
NO!! THAT SUD-DENLY,
MY HIPS ARE MOVING ON THEIR OWN...!!
NO! DON'T STIR ME U... AAH!!
HAHI HKU AH AAH !!
HAA ...NH !

LOOK! IT'S THE *THING* YOU WERE WAITING FOR!

AH AH AAH !!

H...HOT! MY *GROIN* FEELS SO HOT!

YOU'RE HOLDING ME *COMPLETELY* INSIDE YOU, AREN'T YOU!

HAAH, KU, IT'S DEEEEP !!

NO... HAA, SO INTEN ...SELY

HAA NH !

IT'S GOOD, IT FEELS... GOOD !!
DOES IT REALLY FEEL THAT GOOD?
HOW IS IT? MS. FELDT!
HAA, HAA, IT'S HOT INSIDE MY PUSSY YYY.
FELDT T...
FUHKU
MY NIPPLES BEING RUBBED, I, IT'S GOOD!

IS IT ALRIGHT THAT ONLY YOU'RE GETTING OFF?

HAAAH AH KUU !!

T, THAT'S RIGHT. DO IT JUST LIKE THAT!

STOP IT FELDT !!

AHA

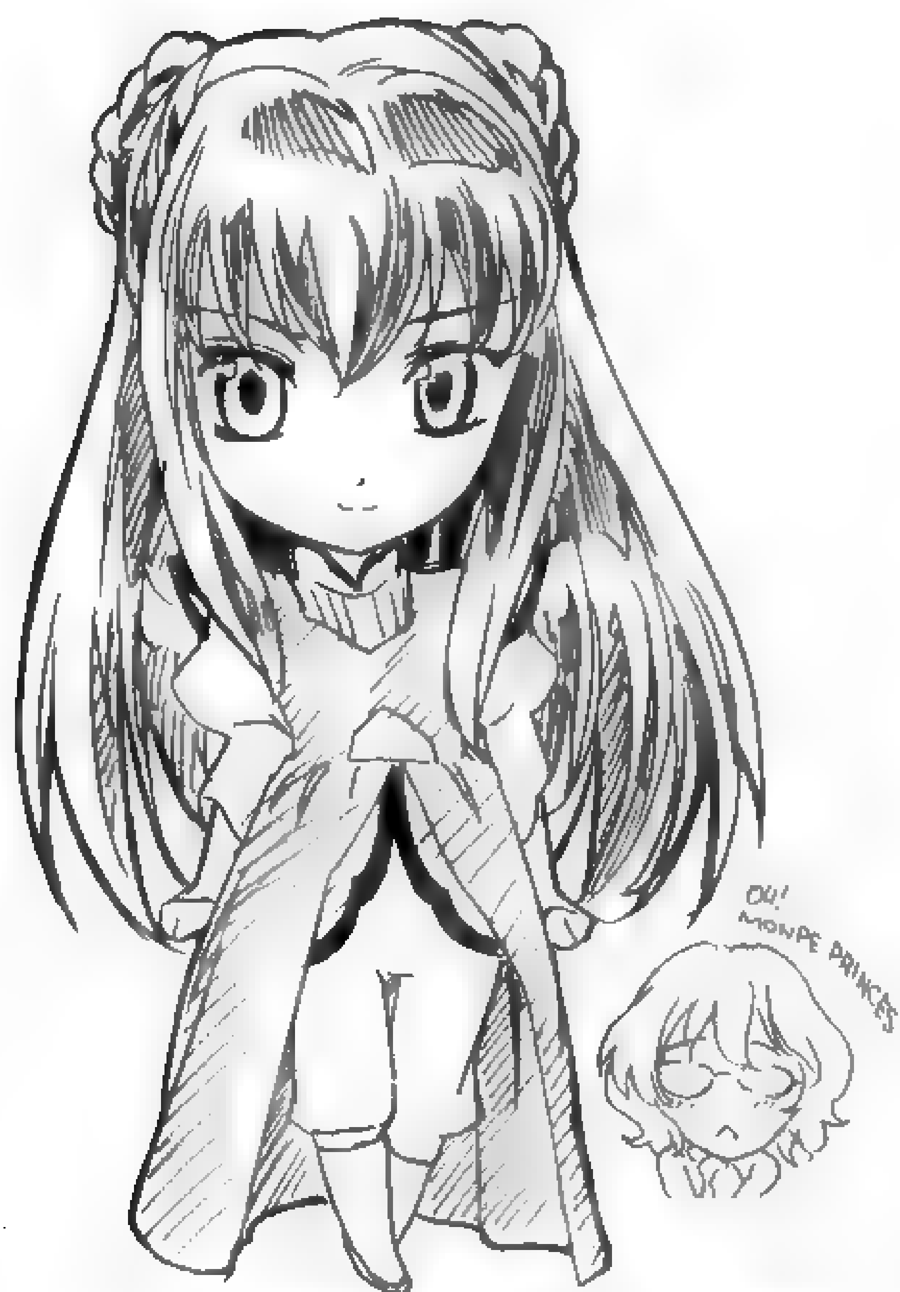

AH AA AAA !
EVEN THOUGH IT WAS LIKE THIS, I'M HAPPY...
HAH HA AH !!
I'M GONNA CUM INSIDE YOUR PUSSY!
I CARED ABOUT YOU!
LOCKON, I LOVE...D YOU...
... GOD DAMN IT.
...I,
GOD DAMN IT.











トランザム・ダブルオー

TRANS-AM00

GANDAM-OO ONLY IMAGINATION BOOKs.

ダブル・フェイス
Double Face

作・美月ひな

からん、とグラスの中の氷が鳴った。
バーボンの中の氷は早く溶ける。
バーボンのアルコール度数が普通のウイスキーよりも高いからだが、遥か昔の開拓時代の魂が氷を溶かしているのではない、と思ってみたりもする。
まったく意味のない感傷的な思考だ、と、わたし――スメラギ・李・ノリエガはそっとため息をついた。
感傷的な思考。
それは、戦術予報士にはまるでいらない感情である。
余計な感情が入れば、大切なときに迷う。
そして判断を狂わせる。
いっそ感情などはない方がいい。
だが、そう思いつつも々、人一倍脆弱な「感情」が自分の中に流れているのは自分が一番よく知っている。
グラスを持ち上げると、バーボンを喉の奥に流し込むように飲んだ。
喉が痛くなるような熱さとともに、バーボンが胃の中へと送りこまれた。
胃の中がかっと熱くなって、頭の芯が痺れるような酔いが回ってくる。
そして、酔っているときだけが、唯一の「罪を許された時間」だった。
大きく息をついてグラスを置く。
と、ドアが開く音がして、誰かが入ってきた。
「アレルヤ君?」
「また飲んでるんですか?」
少々とがめるような視線で言われて肩をすくめる。
「わたしはこれがないと生きていけないのよ」
「少しひかえた方がいいですよ」
「いやよ。これはわたしの命なの」
「命?」
アレルヤ君の声が、かすかに冷笑的な響きをおびた。
冷笑的、というのはいかにも彼ににつかわしくないような気がした。
彼の方に目を向ける。
金色の瞳が、まるで観察するかのようにわたしの方を見つめていた。
金色の瞳?
知っているかぎり、彼は少し灰色がかった瞳

の持ち主だったはずだ。
「あなた……誰？」
「おや、酒びたりとはいえ、勘は悪くないんだな。さすがに戦術予報士様ってところか？」
アレルヤと似ている、とすら言い難い雰囲気を感じて、思わず立ち上がった。
「あなた、誰？」
「俺はハレルヤっていうんだ。よろしくな」
「ハレルヤ？　どういうこと？」
「アレルヤの奴はへたれでよ。だめな戦術予報士のせいで命が危なくなっても、文句ひとつ言えない。だから、俺がかわりに文句を言いにできたってわけさ」
「かわり？　ああ。貴方、多重人格なのね」
「なんとでもいいな。とにかく、あんたのくだらない作戦はまっぴらだ」
「そう。ごめんなさいね。だめな戦術予報士で」
それは本当のことだ。彼らの命を危機にさらしたのは、本当に面目ないと思う。
「もっとしっかりしたいのだけれど……」
「それだけか？」
ぴしり、と言われて、少々かちん、とくる。
アレルヤ君本人からならともかく、別人格にこうも高圧的にでられるいわれはない。
「なによ。土下座して謝れとでもいうの？」
「おしいな。もう少しだ」
言うなり、「ハレルヤ」が一歩こちらに近づいた。
「女には女の詫び方ってのがあるだろう？」
言うが早いか、強引に胸をわしづかみにされた。
「なにするのよっ！」
頬を叩こうとした右手を掴まれる。
「あんたの能力で、俺を殴れるわけないだろう？」
胸を掴んだまま、ハレルヤがあざ笑った。
「ひとを呼ぶわよ？」
「どうぞ。恥をかくのはあんたとアレルヤだ。俺には関係ないな」
勝ち誇った顔でハレルヤが言う。たしかにその通り、この人格には傷ひとつつかないだろう。
「どうだい？　俺の言うことをきく気になったかい？」
「どうしたらいいの？」
いまは、主導権は自分にはない。
むろん、ひとを呼んだ上に多重人格のことを告げる、という手段もあったのだが、そんなことをしてはアレルヤの心にどんな傷が残るかわからなかった。
耐えよう、と決める。
「お。いい顔になったな。俺に体で詫びる気になったらしいな？」
「誰があなたなんかに。満足したらアレルヤから出ていってくれるんでしょうね？」

「それはあんた次第だな。どうする？　ここでするか？　それともいい場所があるか？」
「わたしの部屋にしましょう。先にいくから。10分後に来て」
言い捨てると、素早く自室に向かった。
自分の部屋なら鍵もかかるし、防音にもなっているから、この事は漏れないだろう。
5分でシャワーを浴びよう、と決める。いくらなんでもこのままベッドインはごめんだった。
部屋にもどると最短時間で服を脱ぐ。シャワーをざっと浴びると、服を身につけた。
下着をつけるときに一瞬迷う。
煽情的な下着をつけたくはないし、かといってあまりにも野暮ったい下着をつけるのもプライドにさわる。
結局、白のレースの下着にした。
生地の部分もレースで、少々中が透けるものだ。どうせしなくてはならないのなら、下着くらいは気に入ったものをつけておこう、と判断した。
落ち着け、と自分に言い聞かせる。
ちょっとした火遊びなら、経験したことがないわけでもないし、たいしたことではない。
自分に言い聞かせてから服を着る。
10分ちょうどたったときに、部屋のインターホンが鳴った。
ハレルヤは、無遠慮に部屋の中を見まわしたあとに、わたしの方を向いていやな笑顔を浮かべた。
「シャワーを浴びたのか。準備がいいな」
「汗くさい体でしたくないの」
「それはそれは。だが、俺はこのままで相手をしてもらうぜ」
「好きにすればいいじゃない」
「じゃあ、まず脱いでもらおうか。ゆっくりとな」
「なんでそんな注文聞かないといけないのよ？」
「わかってねえなあ」
ハレルヤが苛立った声をだした。
「今日は、あんたが俺に詫びる会なんだぜ？　俺を満足させるためになんでもするのが当然だろ？」
「……」
きりり、と唇を噛んだが、いまはどうにもならない。
ハレルヤはベッドに腰をかけると、にやにやと笑いながらわたしが脱ぐのを待っていた。
ゆっくりと上着を脱いでいく。
シャワーを浴びたばかりの体はまだ暖かく、湯気とはいかないまでも上気してかすかに赤く染まっている。
「ほう。レースの下着か。サービスいいな。ちょっと透けてるじゃないか」
肌にはっきりと視線を感じる。
ただ見られているだけなのに、物理的な圧力を

感じる気がした。
その視線は、決して苦痛ではなかった。むしろ、自虐的な喜びを与えてくる。
本当は、エミリオに詫びたかった。わたしのミスで死んだ彼に。
ブラジャーをゆっくりと外す。
乳房が外の空気に触れるのと同時に、刺すような視線を感じる。
ぞくり、と。
背中を走り抜けたのは、あきらかに悪寒ではなくて快感だった。
罰を望んでいる。
自分の中にひそんだもうひとりの自分が、こうされることを望んでいるのだ。
「あ……」
口の中がからからにかわいて、思わず口を開いた。
体の奥から、蜜がしみ出してくるのが自分でもわかった。
「おやおや。もう感じてるのか？」
「そんなことはないわ……」
口ではそう言ったものの、ハレルヤと目をあわせることができない。
「まあ、いい。こっちに来て、俺の口に乳首を含ませるんだ」
「……」
言われるままにハレルヤに歩み寄る。
足が地面を踏んでいないかのように力が入らない。
ハレルヤの頭を抱き抱えるようにして、胸を顔に押しつけた。
が、ハレルヤはなにもせずに、ただ胸を押しつけられただけだった。
「吸わないの？」
「吸ってください、とお願いしろよ」
「そなんこと……」
「ここまできて、できないっていうのか？」
かすかに怒気を含んだ声とともに、ハレルヤの左手がわたしの髪を掴んだ。
同時に強引に唇を奪われる。
口の中に舌が入ってくると、強引にわたしの舌先をつかまえて、からみつく。
右手が、わたしの胸を掴むと、乱暴にもみほぐした。
「んっ……」
痛い、という声を出そうにも、唇は完全に塞がれていた。
ぐりっ、という感じで乳首を指でつままれる。
「んんっ！」
その瞬間、思わず体がうねった。
予想もしなかった快楽が体に走った。
「乱暴にされたいんだろう？」
ハレルヤがからかうように言う。

「お前は、罰を受けたがってるからな。俺が罰を与えてやるよ」
　耳元に囁かれた。
「そんなこと……」
　ない、といいかける。が、いい終わるよりも前に、ハヤルヤの手が股間を触れた。
「あっ！」
　思わず声が出る。
「おいおい。こんなに濡らしておいて、いやもへったくれもないだろ？」
「濡れてる？」
「自分じゃわからないのか？」
　下着の上から、指でぱちん、と弾かれた。
「これも脱げ」
　言われた通りに下着を脱ぐと、股間から糸のように蜜がこぼれているのが見えた。
　本当に濡れている。しかも、自分で感じているよりもずっとたくさん濡れていた。
　顔がかっ、と熱くなる。
こんな男に、罰を与えると言われて、そしてその罰を求めて濡れるなんて。
「ちゃんとみせてみろよ」
　言いながら、無遠慮に指を忍びこませてきた。
指の関節が体の中に入ってくるのを感じて、思わず体をきゅうっと縮める。
「お。なかなかよく締まるじゃないか」
　からかうように言われたが、もう、心の中にはなんの余裕もない。
　ただ、体が指を感じてるので精一杯だった。
「欲求不満だったのか」
「そんなこと……ないっ！」
「まあいい、とりあえず、今度は俺のをなめてもらおうか。丁寧にな」
　ハレルヤが、挑発するような視線でズボンを脱ぎ、すっかりそそりたった男根をわたしの目の前につき出してきた。
　牡の匂いがした。
　おそるおそる舌を出す。
実際になめたことはまだない。
それがどんな味なのか、感触なのか見当もつかなかった。
　舌の先に「それ」が触れる。
自分でも考えられないほど自然に、舌がその感触を受け入れた。
むせ返るような匂いがする。
が、その匂いはむしろわたしの鼻孔を気持ちよく刺激した。
「あ……」
　思わず声が出た。
そして、同時にわたしの中の「牝」がゆっくりと目を覚ますのを感じた。
　もっと舐めたい。
　舌の先にこんな快感があるなど、考えたこともなかった。

もっと。
死ぬ前に。
彼にもこうしてあげたかった。
贖罪とも後悔ともつかない気持ちが、目の前にある快楽を倍加させているともいえた。
「あんた、舐めるの好きなのか？」
「え？」
上から降ってきた言葉にふと我にかえる。いつの間にか、夢中になって舐めていたらしい。
「ふふん。飢えてるんだな」
馬鹿にしたような視線を感じても、頭のどこかが痺れたようになっていて、腹が立たなかった。
「俺の膝の上に座れ」
命令される通りにする。
体がぞくぞくと疼いていて、他のことが考えられなかった。
座ろうとした瞬間、ハレルヤの右手が見えた。
ちょうどわたしが座ろうとしたあたりに置いてある。中指がこちらに向いて立っていた。
「これは？」
「この指の上にまたがれ」
指の感触を想像しただけで、体がきゅっ、と締まるような気分だった。
入れてみたい。
どきどきと胸が高鳴る。
するり、という感じで指が入ってきた。
体の奥まで刺さるような、快楽。
「あうっ……」
声を出すと、ハレルヤがわたしの唇をむさぼった。
舌が強引に進入してくる。
「んん……」
身をよじったが、それはハレルヤの指を体の奥へと導く役にしか立たなかった。
さらに、ハレルヤの手が、右の乳首をぎゅっと掴んだ。
痛いくらい強い。
が、いまのわたしは、それが気持ちよかった。
「痛い……の……いいっ！」
呂律がまわっていない自分の声がした。
だが、もういまはどうでもいい。
自分からハレルヤの唇をむさぼる。
犯して欲しい。
心から思う。
気持ちいい。
お酒より。
そして、こうやって男になぶられて、ただの牝でいるのが、心の中で望んでいることなのだ。
「いれ……たい」
「ふふん。淫乱なやつだな。そんなに俺のモノをぶちこんで欲しいか？」
「欲しい……欲しい……」

ハレルヤにしがみついて懇願する。
「じゃあ、四つんばいになって、こちらに尻を向けてお願いしろ」
「そんな……」
かすかに残った理性が抵抗した。
そんな恥ずかしいことをしてはいけない。正気にかえれ、と。
が、次の瞬間。
ぎゅうっ、と乳房を掴まれた。
「はああっ！」
最後のに残った理性が吹き飛んだ。
胸の先に火花が散るかのような快感が走る。
入れたい。もうそれしか考えたられない。
わたしはお尻をハレルヤの方に向けるは、牝犬が媚びるような視線を彼に向けた。
「入れて……ください……」
恥もなにもない。
ハレルヤが体の中に入ってきた。
わざとじらしているのか、ゆっくりと入ってくる。
「あうう……」
じりじりとした快楽に我慢できずに、思わず自分からお尻を突き出す。
「なんだ。我慢できないのか？」
からかうような言葉に、首を縦に振る。
「できない……早くう……」
ごりっ、と。
体の中をこすられた。
ハレルヤの男根が、奥までわたしを貫いている。
「入った……てる……ぅ」
ごり。
ごりっ。
体の中をこすられる音を肌で聞いた。
「気持ち……いい……」
どうしてこんな快楽を忘れていたのだろう。
むしろそれが不思議議だった。
わたしは夢中で腰を振って。
そして叫んでいた。
なにを叫んでいるのかは聞こえない。
胸の先も、なにもかも、髪の毛の先まで。
全身が痺れていく。
「あううう……」
意味不明の言葉が聞こえる。
わたしの声で。
「気持ちいいですう……」
体の中で、さらに大きな快楽の塊が膨れあがる。
「あ、いく……いくわっ！」
きゅうっ、と。
自分の体が男根を締めつけた。
同時に、自分の中に熱い液体が吹き出してきた。
それが精液である、ということを頭のどこかが教えてくれた。

だが、いま感じるのは、その熱さだけだ。
「いいっ！」
中に出されている。
それがすごく嬉しかった。
こうやって牝でいたい。
「ふふ。楽しかったぜ」
ハレルヤの声がした。
「アレルヤもよろしくな」
意味のわからない言葉が聞こえた。
次の瞬間。
「スメラギさん？」
アレルヤの声がした。わたしのよく知っている、少し気弱な少年の声。
「え？　これは……？」
アレルヤの驚愕するような声。
どうやら、ハレルヤだったときのことは憶えていないらしかった。
「スメラギさん？」
悲鳴のような声がした。
そして、その声を聞きながら、わたしはふっと思った。
アレルヤは、どんな風にわたしを抱いてくれるのだろう？
わたしは、牝の視線でアレルヤを見た。
「ねえ、アレルヤ」
ゆっくりと、蠱惑的に、しゃべる。
「わたしを抱いて？」

そしてわたしは失われた快楽を思い出す。
酒にかわる新しい快楽を－

END



トランザム・ダブルオー

TRANS-AM00

GANDAM-OO ONLY IMAGINATION BOOKs.

ROYAL PRINCESS MARINA ISMAIL,

IT'S NOSTALGIC DON'T YOU THINK? THAT OUTFIT.

OUR GROUP PREPARED IT JUST FOR YOU, AND THIS CHOKER TOO... SEE!

AH ...

IT'S OBVIOUS THAT YOU'VE BEEN WORKING WITH THOSE CELESTIAL BEING GUYS.

PLEASE ...LET ME GO... TO THE BATHROOM.

EVEN IF YOU CAN'T RESTRAIN YOURSELF, IT'S FINE IF YOU JUST DO IT HERE, RIGHT?

WON'T YOU PLEASE ANSWER OUR QUESTIONS ?

OH MY? YOU'VE ALREADY GOTTEN THIS WET, HUH.

HA HAHA HAHA, THAT'S A GOOD LOOK FOR YOU!

S, STOP IT!

IT SEEMS LIKE YOU CAN'T STOP OVERFLOWING, HUH. TO BE PEEING YOURSELF AT THAT AGE ...MY GOODNESS.

NOO! DON'T... DON'T WATCH !!

UH UU ...

THIS IS FOR BEING OBSTINATE WITH THAT MOUTH OF YOURS... FUFUH

FUGUU! SHTOP

HYABUU!

HOW IS IT? THE FEELING OF BEING VIOLATED ORALLY?

THE ONLY WAY TO KEEP YOUR MOUTH FROM TALKING IS LIKE THIS, RIGHT?

YOU'RE ALREADY ONLY LISTENING TO YOUR BODY, AREN'T YOU.

FUGUU!!

OBH OOE!

HA BUU FUH FUH

PWAH!

HIYAAAA!!

COME ON! YOU HAVE TO TIGHTEN UP THE BACK OF YOUR THROAT!!

THE INSIDE OF YOUR MOUTH BRIMMING WITH JUICES FEELS SO WARM!!

EVEN HER ROYAL PRINCESS IS JUST A FEMALE AFTER ALL.

IF YOU WON'T ANSWER WITH YOUR UPPER MOUTH, WE'VE GOT NO CHOICE BUT TO COMPLETELY QUESTION YOUR OTHER HOLES, RIGHT?

IT SURE IS SOMETHING TO BE A VIRGIN IN YOUR FRONT HOLE TOO EVEN AT AGE 24.

WE HAVE TO PLUG THE PEEING PRIN- CESS' HOLES, DON'T WE!

HERE IT COMES!!

I, IT HURTS! IT HURTS! NO, NOOO !!

MY ASSS F... FEELS SO HOTTT!!

UGGU, DON'T... MOVEE, NO, NOO OO!

YOU HAVE TO EXPERIENCE IT SOONER OR LATER!

HIG GUU, LIKE THIS *NH*...

LIKE THIS IS, NOO! AGGU UU!!

AFTER ALL, THIS IS A *BODY* YOU CAN USE IN POLITICAL NEGOTIATIONS TOO.

BU FUU! FUGU FUGU

HEY, USE YOUR TONGUE MORE!

HI GI !!

COME ON! DRINK IT!!

HYA BUH BU BUH FUU !!

HM? COULD IT BE YOU FEEL LIKE TALKING NOW? HAHA... BUT THAT'S IMPOSSIBLE WHILE YOUR MOUTH'S BEING KEPT SHUT.

IT TRULY IS UNFORTUNATE FOR SOMETHING LIKE THIS TO BE THE FIRST SEXUAL EXPERIENCE OF THE ROYAL DAUGHTER OF A RUINED COUNTRY, HUH!

SUCK MY BALLS TOO! DO IT CARE-FULLY!

HOW IS IT? IT'S STICKING DEEP INSIDE, RIGHT? I'M GOING SMASH INTO YOUR WOMB!

LOOK THERE, DO YOU SEE WHERE I'M GOING IN AND COMING OUT OF YOU?

AH AGUU HAHI III

HA HAHA! SHE'S A WOMAN WHO CAN SUCK HER OWN TITS TOO!

NHO BUH! SHT OP

I'M GOING TO POUR MY CUM INTO YOUR ASS-HOLE!
HI! HI AH AA !!
H, HOT! IT'S SO HOT TTT!!
I'M GONNA CUM INSIDE THE FRONT TOO!
NOO! NO! STOP PPP!!
DOES YOUR ASS FEEL IT TOO?

HA AH !
AH NOO! AA AAH!!
THERE! TAKE IT ALL!!
KUKU... EXACTLY WHO'S CHILD ARE YOU GOING TO GET PREGNANT WITH?
WITH THIS APPEARANCE SHE'LL PROBABLY MAKE THE NATION OF AZADISTAN DESPAIR TOO, WON'T SHE.
WE'VE TRULY OBTAINED AN EXCELLENT PIECE,
WELL...AT LEAST AS FAR AS WE... A-LAWS ARE CONCERNED...










GN-0000/7S
SEVEN SWORD
-00-

NOW THEN, THIS TIME,

HOW ABOUT ALL FOUR OF US OOOOOO MEISTERS BE YOUR PARTNERS AT ONCE!

HYA HYABU

THOUGH WE'VE ALWAYS DONE IT SEPARATELY, DID MS. SUMERAGI ALSO PREDICT THIS?

AFTER ALL, IT'S ABOUT TO COME TRUE.

HAAH, MY TITS ARE, SHTOP ...I CAN FEEL IT TTT.

JEEZ ...I REALLY WANT TO SHOW IT TO YOU IN A MIRROR,

YOU BLOWING ME WITH THAT INDECENT FACE.

DESPITE YOUR HUGE BREASTS, YOU HAVE GOOD SENSI-TIVITY, DON'T YOU.

REALLY.

YOU DIDN'T JUST LIGHTLY CUM, DID YOU?

I WONDER IF THIS TIME WAS FROM YOUR ASSHOLE, OR ALL THREE HOLES.

ITS SEEMS YOU'RE NOT SATISFIED WITH JUST A FINGER. IT'S ABOUT TIME I SHOVED THIS INTO YOU.

NAAAH

HA

AH

AHAAAAH!!

IT'S GOING ALL THE WAY INSIDE, I'M SO FULL.

YOU'RE EASILY GULP-ING IT DOWN, AREN'T YOU.

COME ON, IT'S NO GOOD IF YOU'RE THE ONLY ONE GETTING OFF, RIGHT?

AAH... BUT, I, IT'S SO INTE-NSE EE.

AH, AH, IT'S GOOD!! IT FEELS SO GOOD DDD.

H, HOT STUFF, INSIDE ME!!

AHAAAHAH!!

HEY!! SETSUNA!! DON'T CUM IN HER, IT'S NOT YOUR TURN YET, RIGHT!!

COME ON!! DON'T JUST SIT THERE, NEXT!!

SHE'S REALLY BEEN HOGGING ALL FOUR OF THEM UNDER THE *PRETEXT* OF PRESERVING SECRECY, HASN'T SHE.

BUT I'M FELDT'S LOVE ***SLAVE***, RIGHT!

LET ME LIE DOWN NN.

END







031




「宇宙はいいわ
肩がこらないもの。」
「酒のまわりも
良くなるしね♡」

□あとがき

という事で
ダブルオー本
いかがでしたでしょうか？

ダブルオーは男女間の
恋愛模様の移り変わり
というより、
あらかじめ恋人が
ほぼわかっている展開
だったりなので、

ロックオンが髪を切っている
場面とかでロックオン×刹那と
いったような
カップリングの妙を楽しむ
といった見方も
なるほどなぁ〜と
いった感じで
勉強になりました。

他にはクリスティナさんの
御奉仕なんてストーリーとか、
紅龍×王留美とか
書けたら良かったかも
ですね。
平和の為の武力という
そもそも矛盾があるなら、
食べてるのに痩せるって
矛盾があれば大歓迎！
とか思うのでした。

ご意見ご感想
叱咤激励などありましたら
宜しくお願いします。
それではまた会える日まで
ごきげんよう〜〜。



TANGE KENTOU CLUB



トランザム・ダブルオー

TRANS-AM00

GANDAM-OO ONLY IMAGINATION BOOKs.

丹下拳闘倶楽部 HP

http://park19.wakwak.com/~myf/yokota/tange/tange.html

横田守 HP

http://park19.wakwak.com/~myf/yokota/

土代昭治 HP

http://park19.wakwak.com/~myf/dodai/index.html

発行：丹下拳闘倶楽部


TRANS-AM 00
TANGE KENTOU CLUB